

SOWER

ソア=種まく人
No.5
November 1994
財団法人
日本聖書協会

特集 国際化のなかで 在日外国人と教会



聖書

親しみやすく 格調の高い 最新の翻訳
新共同訳

永遠の
ベストセラーを
あなたに

神さまからの贈りもの



好評
発売中

ジャケットが新しくなりました

- 小型聖書 NI44 (黒・赤) A6判 クロス装 定価2,600円
- 小型聖書 旧約聖書統編つき NI44DC (黒・赤) A6判 クロス装 定価3,100円
- 中型聖書 NI53 B6判 クロス装 定価3,800円
- 中型聖書 旧約聖書統編つき NI53DC B6判 クロス装 定価4,500円
- 中型聖書 NI55 B6判 合成皮革装 定価5,500円
- 中型聖書 旧約聖書統編つき NI55DC B6判 合成皮革装 定価6,300円
- 大型聖書 NI64 A5判 クロス装 定価5,400円
- 大型聖書 旧約聖書統編つき NI64DC A5判 クロス装 定価6,400円
- 大型引開つき聖書 NIO53 A5判 クロス装 定価6,000円
- 大型引開つき聖書 旧約聖書統編つき NIO53DC A5判 クロス装 定価7,000円

(定価は税込)

- ご注文はお近くのキリスト教専門書店、または全国の書店へ (直接当協会にご注文戴く場合、別途に荷造送料がかかります)
- 一部、旧定価品もあります。お問い合わせは下記まで

財団法人 日本聖書協会

〒104 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3567-1987 (ダイヤルイン)
FAX 03-3567-4436

新5
聖書の
世界

写真／文 横山 匡



モレ山麓のナイン

イエスは、カファルナウムを拠点に町や村を巡って福音を伝え始めた。ある日、弟子たちや大勢の群衆も一緒に、ナインの町の門に近づいた時、葬儀の列に出会った。一人息子を亡くして泣き悲しむやめの母親の姿が、イエスの心を動かした。棺に手を触れ「若者よ、起きよ」と命じると死人が生き返った、とルカは記しています。ナインはヘブライ語のナイム（業しい、快い）に由来するようですが、悲しみのどん底から一転して喜びの絶頂まで引き上げられた母親の感激の姿が忍ばれます。現在は、ネインと呼ばれる人口六百人ほどのアラブ人の小さな村で、モレの丘の北麓に位置しています。

*ルカによる福音書7章11-17節より

目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。
わたしの助けはどこから来るのか。
わたしの助けは来る
天地を造られた主のもとから。

(詩編二二 1・2節)



江尻美穂子
日本YWCA会長
雄大な山々を見上げる時、神様の創造のみ業の偉大さに感動をおぼえます。この世のさまざまなストレスから解放されて、心が豊かに満たされ、強い力がわき上がってくるのです。

Sower
No.5
1994

C O N T E N T S

特集

2 国際化のなかで
在日外国人と教会 畑山廣文

8 エッセー①
本田哲郎「いま大切にしたいこと」

10 INTERVIEW
イーデス・ハンソンさん

12 BSLレポート 国内／海外

13 総主事室 佐藤邦宏

14 PEOPLE
読んで、祈って、96時間27分
宇部緑橋教会「聖書全巻リレー朗読会」

15 読者のひろば

16 歴史接写
コルポーター 仲井一雄

17 聖書図書館蔵書シリーズ①
翻訳委員社中訳『引照新約全書』





バプテスト羽村教会

在日外国人と教会

…寄留者を愛して食物と衣服を与えられる。あなたたちは寄留者を愛しなさい(申命記10:18-19)。日常の中に、いつのまにか浸透してきた国際化——教会はそれにどう対応しキリスト者はどう生きるのか。ここに、4教会の礼拝をレポートする。

畑山廣文 日本バプテスト同盟気仙沼教会牧師

今年の五月十日は、わたしにとって記念する日だ。南アフリカのネルソン・マンデラ氏が黒人として初めて大統領に就任した。この日をどれだけ待っていたか。アバルトヘイト(人種隔離政策)の中で抑圧され、差別され、虐げられてきた黒人にとって、三百年待ちに待った解放の日だった。

一九九一年五月、わたしは日本キリスト教協議会の派遣宣教師として南アフリカのヨハネスブルクへ単身でアバルトヘイトと闘っている南ア教会協議会の姿を学びに行きました。九〇年二月に現大統領のネルソン・マンデラ氏が二十七年の獄中生活から解放されたが、南ア国内は白人右翼と黒人の対立が起り、各地で血を流し、内戦状態だった。

南アで最初に見たものは、白人の農場で働いていた黒人が農場内での礼拝を拒否され、農場外での礼拝を余儀なくされていた。「これがアバルトヘイトか」と思った。しかし、ヨハネスブルクの教会では、白人と黒人の区別なく一緒に礼拝が行われていた。

わたしは、南アに到着して一か月にもならない時に、白昼、黒人の少年四人組にナイフをわき腹に突きつけられて、パスポートと全財産が入っていたショルダーバックを強奪されてしまった。これで観光気分はぶっ飛んでいき、異国の地で日本人にも会えない状態のなかで落ち込んでしまった。

しかし、この体験は初めて自分自身が外国人であることを意識した出来事だった。

特集 国際化のなかで

単一民族国家の日本のなかでは考えられなかったが、ヨハネスブルクの教会では、白人、黒人、インド人、中国人とさまざまな文化と価値観を持った人が一堂に集まって礼拝していた。わたしはそのなかに受け入れられ、異文化の中で、多文化を持った、多民族教会のすばらしさを学んだ。

「寄留者を虐待したり、圧迫したりしてはならない。あなたたちはエジプトの国で寄留者であったからである」(出エ二・二一〇)、「他国の人をしいたげるな」という聖書の言葉がここでは生きていることを痛感した。これらの体験は、何もわたしだけではないだろう。多くの人が旅先で感じたことだろう。

それを今度は日本に当てはめてみてはどうだろう。「ポードレース時代」といわれている日本では、南米から、アジアから多くの外国人労働者が集まってきた。日本の教会が好むと好まざるとにかかわらず、日本の教会に外国人が礼拝に参加してくる。わたしたちはイエス・キリストを信じる信仰によって、人種、民族、国家を越えて一つとなることを示されている。そして、すでに日本の教会の中で、多民族礼拝が行われている。四教会の取材を通して、日本の教会における外国人との取組を共に考えてみたい。

二十〜三十人のミャンマーのカチン族のクリスチャンが集まるようになり、その多くが英語礼拝に出席するようになった。英語礼拝に出席するカチン族のクリスチャンが多くなってきたことにもない、九二年七月から毎月第二日曜日の午後にはカチン語礼拝を行うようになった。

英語礼拝からはアメリカ人留学生が信仰に導かれたり、霊的な刷新を与えられ、外国人伝道の必要性をさらに高めることになった。そのころから、カチン族の人たちは増えてきて五十人くらいになり、日本語礼拝の出席人数を上回るようになってきた。

ミャンマー(ビルマ)の人口はおおよそ四千万人といわれ、カチン族は、その中で約百万人くらいの子山岳少数民族で、全体の八十五%がキリスト教徒といわれている。ミャンマーは仏教国で、数年前からアメリカや日本から宣教師を派遣することはできない状態になっている。

英語礼拝から切り離してカチン語礼拝を始めたが、イエス・キリストのメッセージを母国語で聞きたいとの切望のなかで、協議した結果、ミャンマーから牧師を招聘することに

在日外国人への伝道を試みて

ミャンマー・カチン語礼拝／東京平和教会

在日外国人労働者はおおよそ百六十万(NC調べ)という時代の中で、日本バプテスト同盟東京平和教会(東京都西早稲田・丹野真人牧師)ではカチン語の礼拝を行っている。

東京平和教会は八八年に早稲田に移転してきた。その時から在日外国人のための伝道の重要性を感じ、アメリカンバプテストの宣教師が英語礼拝をしてきた。九二年の春ころから

ミャンマー・カチン州から迎えられた
ラスク・ダウ・ゴン牧師
日本バプテスト同盟東京平和教会
写真撮影 山名敏郎



毎月第2日曜日の午後
カチン語の礼拝がもたれている。

日本人教会の中での韓国語礼拝

淀橋教会

「韓国語礼拝」と聞けば、在日大韓基督教会の礼拝かと思ってしまうが、日本の教会の中で、韓国語（ハングル）で礼拝を持ち、日本人礼拝を数字の上で凌駕している教会が東京都新宿区にあるウエスレアン・ホーリネス淀橋教会（主管牧師・荻野龍弘）だ。現在、韓国語の礼拝には多い時で四百五十人以上の若者たちが出席している。祈禱会でも会堂に入りきれなく廊下に椅子を並べて礼拝をしている。この韓国語の礼拝は淀橋教会が、日本語と並行して取り組んできたものだ。

この教会で専任宣教師として働いている鄭愛里さんは「韓国人教会をつくるのではなく、

のクリスチャンにも大きな影響を与えた。「伝道すること、祈ること、捧げること」をカチンの若者から教えられている」と丹野牧師は言う。

東京平和教会は現在、日本語、英語、カチン語の礼拝を行っている。それぞれが独自の役員会を形成し、各部と連携しながら宣教している。

イエス・キリストにあって、人種、言語、文化を越えて一致した教会が形成されている姿をここに見ることが出来る。

日本人の教会のなかで共に宣教していくことがボリシーとしてあるので、分離独立するようなどは考えていません」と話してくれた。そもそも韓国語礼拝の始まりは、八六年に韓国の宣教師として金圭東氏が来日して、八年十月二日に十六人の韓国の若者で韓国語の礼拝をスタートさせたのが原点。在日韓国人ではなく、キャンパスクルセードで各大学に留学してきていた青年たちが対象となった。当初は日本語の礼拝に出ていたが、「日本語よりも母国語の方が、恵まれる」ということから、分離して礼拝を持つようになった。「イエス・キリストはわたしたちの平和」（エ

フェニ・二四）という聖書の言葉によって「神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」（マルコ三・三五）。

「キリストにあって、人種を超えて兄弟姉妹という信仰に押し出されて、日本の宣教を助けることに使命感を感じて日本にきました」と鄭愛里さん。

よく日本の教会と韓国の教会が比較され、韓国の教会の熱心さと成長に驚嘆させられる。文化や歴史が異なるので、単純には比較して論じられないが、「信仰的熱心さ」はみならずべきものがあると、多くの牧師が言うのを

聞く。韓国に行くまでもなく、この教会の韓国語の礼拝を見ればそのことが伝わってくる。

この教会の韓国語の礼拝に集う若者は、日本の教会成長を願っている。それ故、日本の教会で共に働き、何でも一緒にしたいと思っている。何ができることなのかというと「それは祈り支え、証し人としての模範を示し、助けになれることだ」という。

何とも力強い言葉だろう。「日本の宣教」のために、日本人と韓国人の両者が共に宣教し、祈り進めていく姿は、まさに「インターナショナル、キリストの一致」をここに見る。

1986年に金圭東牧師が来日して
韓国語礼拝は始まった。
ウエスレアン・ホーリネス淀橋教会
写真撮影 仲村 堪



南米の日系人スペイン語礼拝 バプテスト羽村教会

一九八九年ころから、いわゆる南米日系人の就労が急増してきた。アジアの労働者の締め出しと、ブラジル、ペルーなどの国の経済的インフレで、日本に外国人労働者としてはいって来るようになった。

羽村市は東京都の多摩郊外で、衛星都市として発展してきた。そして工場も多量と自動車工場や電気機械工場や精密機械の工場が点在し、外国人労働者が多い。といつても外国人が多く見られるようになったのは四五年前からの現象だ。

日本バプテスト同盟バプテスト羽村教会

（東京都羽村市・牧師横山早紀子）では、南米のペルー、ボリビア、ブラジル人の若者が集まってスペイン語の礼拝が行われている。

この教会でスペイン語の礼拝が始まったのは四年前。レガルド・エンドリケ・エスピノーサ（通称キケ、三十五歳）さんと妻のジーナ岡田（三十三歳）さん夫妻が中心となって礼拝が持たれている。

「日本語ができず、スペイン語しか話せなくて、少しの英語だけでコミュニケーションしか取れないときに羽村教会は何の問題もなく受け入れてくれた」と。さらに、ペルーの

韓国語礼拝の
専任宣教師の鄭 愛里さん(右)

韓国語礼拝に集う青年たちの
聖歌隊





ナイジェリアの人たちの礼拝は力強い。日本キリスト教団堀切教会 写真撮影 山名敏郎



堀切教会はナイジェリアの人たちにとって週に1回仲間と会える場所である。

アフリカの風が下町の教会に吹いている

堀切教会

アフリカのナイジェリアという国は知らなくとも、一九六〇年に内戦で五百万人の餓死者を出した「ビアフラの子供たち」のことを知っている人は多いのではないかと思う。日本で働いているナイジェリアの青年たちが東京都葛飾区堀切の日本キリスト教団堀切教会で礼拝を持っている。

今、ナイジェリアから日本に来て働いている人たちは、東京だけで四千人いる。堀切教会のある地域は、工場が多く、アジア・アフリカからの外国人の多いところ。

人たちに教会員が日本語の教師もしてきたことにより、スペイン語を話す人たちが集まってきた。

スペイン語圏のクリスチャンはカトリックが多い傾向にあるが、キケさんはペルーのバプテスト教会で信徒伝道者の訓練を受けていたことも幸いして礼拝の指導的役割を果たしている。自らギターを演奏して賛美する。月一回は日本語礼拝に参加する。初めは、英語をスペイン語に通訳して教会の行事などを伝えていたが、二年前から日本語の説教を同時通訳してくれる人が教会に来てくれることにより、日本人の牧師の説教をスペイン語で

聞くことができるようになった。

そのほか、毎週日曜日の午後からスペイン語の礼拝を持ち、現在は十五人ぐらいのメンバーが出席している。

教会の伝道は一緒に行っている。トラクト配りやポスター貼り、会堂の掃除なども一緒に行っている。「ペルーの人たちの伝道や奉仕活動を見て、日本人のクリスチャンは良い刺激を与えられています」と横山牧師は強調する。

キケさんはスペイン語礼拝のネットワーク作りを志している。日本語・スペイン語の対照聖書はまさに「福音」となっている。

九〇年の秋に斉藤 宏牧師のところにナイジェリアの青年が礼拝に来たことから、次々と集まるようになった。そして、牧師夫人が日本語を教えることによって、さらに増えていった。現在は二十人がこの教会の会堂を借りて日曜日の午後に礼拝を持っている。

斉藤牧師からバプテスマを受けた人や、ナイジェリアの人たちに説教していたファブミン牧師は帰国し、現在は五月に来日したサムエル氏が礼拝の指導的立場をとっている。外国人労働者には労働条件の問題や、就労

ビザ、失業などの問題が回っている。堀切教会では言葉だけでなく外国人の労働全体にわたって支援をしている。

ナイジェリアでは、人口の半分がキリスト教で、そのうちペンテコステ派が全体の五十%を占めているといわれている。

ナイジェリアの人たちの礼拝はまさにダイナミック。イエスを力強く賛美する姿は、まさにアフリカの風が吹いている。「ハレルヤ!」をからだ全体で歌い、具体的にイメージできるメッセージ。そして多くの人たちのために祈る。

アフリカの教会は、教会教派に関係なくどこでも礼拝はリズムカル。そして、全身で主を賛美する。とても礼拝中に眠ってなんかない。

この喜びと感謝の姿を日本の教会でも取り入れて、日本の教会の中にアフリカの風を送り込んでもらいたい。

国際化の波と風が日本の教会を取り巻いている現状を、日本の教会はどれだけ認識しているだろうか。「国際化」と言っているわりには、はたしてアジア、アフリカ、南米の人たちとの国際化ができてきているのだろうか。

アメリカ、ヨーロッパの宣教師たちによってもたらされた日本のキリスト教会は、欧米諸国の国々に顔を向けてきた。教会の回りに住んでいるアジアの国々の人々が、教会の扉

バプテスト羽村教会のスペイン語礼拝には、ペルー、ボリビア、ブラジルの人々が参加している。



スペイン語礼拝の中心的存在のキケさんは自らギター演奏で賛美する。バプテスト羽村教会 写真撮影 山名敏郎



の開くのを待っているのに気づくべきではないか。

「インターナショナル」とは、異なった人種、文化、言語、価値観を持った人と「共に生きる」ということだが、具体的に、四つの教会の中で礼拝が行われている姿を見ていると、イエス・キリストにあつて「共に働き、共に礼拝し、共に宣教する」ということではないかと思う。

わたしも、南アフリカで英語を話している時は黒人の友達ではできなかった。しかし、黒人の言語「ズール語」を毎週黒人の青年から学ぶことによって、多くの人と交わりを持つことができたし、また彼らに受け入れられ、アフリカ人が持つ言葉の意味の深さを学んだ。そして、その国の人々との距離は急に縮まった。そして、その共通項として「聖書」の存在がある。聖書はわたしたちの生活の規範であるかぎり、どんな言語も超えて「共に生き、共に働く」ことができるのだと信じている。

日本聖書協会では、在日外国人の聖書が必要とする人々のニーズにも応じられるよう、アジアの諸言語をはじめ外国語聖書の頒布も行っている。

● 畑山廣文 (はたやまひろふみ)

一九四九年北海道生まれ。一九七三年関東学院大学神学部卒業後、日本バプテスト同盟深川、松本、国分寺新生教会で牧会伝道。一九九一年にNCCから南アフリカ教会協議会に十か月間派遣される。現在、日本バプテスト同盟気仙沼教会牧師。

いま 大切にしたいこと



私がかこ釜ヶ崎に来て、この十一月でちょうど五年になります。日雇労働者の街釜ヶ崎での生活は、私に大きな変革をもたらしてくれました。聖書の読み方が変わりました。福音が生きたものとして響いてくるようになりました。少しずつ自分自身が解放されていくのを感じます。「激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、ご自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげている」(ヘブライ五・七) 生身のキリストに日々出会い、ともに叫び声をあげながら聖書を読むとき、みことばに熱と光を感じます。五年前まで聖書研究所のスタッフとして翻訳と作註に専念し、聖書学の教師として神学校で教えていたときには見えなかったものが、見えきたように思います。

夜、野宿をしながら「あしたこそ…」と仕事を待つ労働者たちの安否を尋ねて、パトロールするときによくあることですが、五人十人とかたまって段ボールを敷いて寝ているところに、ぼつんと一人だけ膝を抱えて起きている人がいます。声を掛けて、どこか具合でも悪いのかと尋ねると、腹が空いて眠れないという。このところずっとパンの耳と水だけで過ごしているとのこと。それならと、用意してきたおにぎりを差し出すと一瞬間を輝かせますが、寝ている他の人たちを指して「みんなの分あるんか、わし一人やったらよう食わん」と手を出しません。貧しさの極みで仲間を思いやるこのエネルギーは、どこからくるのでしょうか。じゅうぶんと持ってきてると言うのと、ほっとした顔でみんなを揺り起こすのです。主はここにおられる、と自然に思えてしまいます。

日本最大の「寄せ場」といわれる釜ヶ崎は自然発生したものではありません。日本社会の産業構造は「寄せ場」を〈使い・捨て〉ができる労働力の〈生簀〉として意図的に温存させ、景気の好・不況、各企業の経営状態の変化にもなうリスクを、最小限に押さえる「安全弁」の役割を担わせてきました。敗戦後まれに見る大型不況のしかかる今、まさにその安全弁の操作が、行政も企業も手を汚さない形で巧妙に行われています。民間(暴力団)の斡旋業者「人夫出し」による、「顔付け」手配という一方的な労働者選別です。高齢者(五十代!)および体力がないと見なされる者から、切り捨てられています。

九一年秋(バブル崩壊)以降、釜ヶ崎では仕事が極端に減り、一人が仕事に行けば九人がアブレるという状態が続いています。同じ日雇労働者でも仕事に行ける層とアブレる層に分断され、五千人もの労働者が野宿に追いやられています。「自助努力」の範囲を超えた長期大型不況の今だからこそ、公共性をもった行政が介入して公平な仕事の分配を行わせなければならぬのに、それがなされないからです。野宿を余儀なくされている人の数は、例年同時期のおよそ八倍から十倍にもなっています。

肺病に侵されながら野宿を続けている四十五歳のMさんは、段ボール集めをして一日三百円かせいで、一杯代と一番安い弁当代にあてています。リヤカーを引いてよく呼吸困難を起し、救急車で病院に運ばれますが、いつのまにか病院から出て、また胸をぜいぜいいわせながら野宿しています。病院が窮屈で、酒ががまんできなくて飛び出してきているものとばかり思っていました。ところが、そうではなかったのです。「わしが言われるんやったら、ええ。隣りに寝てるおっちゃんが粗相して、看護婦が部屋中に聞こえるようにむちゃくちゃ嫌味言いやるんや。おっちゃんは、じっと黙つとるしかない。くそおもて、看護婦どついでわし出て来たつた」。

自分への辱しめは歯をくいしばって耐えられるけれど、弱い仲間が侮辱されるのは我慢できないという人は、釜ヶ崎には少なくありません。体の不自由な貧しい者や「やもめ」に対するファリサイ人のあらしい方に怒りを禁じえなかったイエスの心は、こんなふうだったのでないかと思うのです。

本田哲郎 1942年生まれ。フランスシコ会司祭。聖書 新共同訳旧約編、フランスシコ会訳聖書の翻訳者。現在、釜ヶ崎で活躍。



読んで、祈って、
96時間27分—

創立70周年記念「聖書全巻リレー朗読会」

日本キリスト教団宇都緑橋教会では、今年、創立70周年を迎え、「聖書全巻リレー朗読会」なるものを春の大型連休の期間に実施することができました。これは、教会の全員がリレー方式で文字通り昼夜を分かたず聖書全巻を読み継ぐという、史上初ともいえる試みです。

このとてつもない企画を牧師が提案したとき、皆は驚き、なぜ？なんのために？といった反発もありましたが、これに全員で挑戦することは神への応答（信仰告白）の一つのあり方であると意義づけ、賛同を得ました。そして、実行委員会を作り、真剣な準備を進める中で皆の心が「内に燃えた」のでした。

実施方法は、①場所は礼拝堂。朗読者は講壇上で、長年読み慣れてきた講壇用の口語訳聖書を読む。②朗読者は2名で組んで1章ずつを交互に読み、30分間を受け持つ。これを1単位として順次リレーする。③聴衆も必要。順番待ちの人はなるべく早く来て聞き手になること。

かくして、4月30日（土）開会礼拝の後、正午スタート。以来、聖日の主日礼拝を挟み、延々4昼夜を読み続けました。教会員の他、家族や求道者、帰省した会友ら、参加者総数118名。リレーした人は延べ474名。読了は5月4日（水）正午過ぎ。感動の瞬間を全員で分かち合い、閉会礼拝と感謝会をもちました。み言に聞くことの大切さと連帯感を深めることができ、いま感謝でいっぱいです。ぜひ、皆様の教会でも、これに挑戦してみませんか。

日本キリスト教団 宇都緑橋教会
牧師 陣内厚生

「しなやかに生きる」に心ひかれて繰り返し読ませてもらいました。素面に神様の恵みが書かれているのでも読み易かったです。（尼崎市 貞廣英子）
 最後まで読んでいただけると感謝の念にたえませんが、これからも期待下さい。

今号は、特に三年後定年を迎えるので興味を持って読ませて頂きました。会社（仕事）人間なので言葉に生きる仕事を折り返すつづきとあります。よく希っておりますので、有益な記事でした。（立川市 平澤基幸）
 ソアが定年後の生き方に何かヒントを与えられたらこんなに嬉しいことはありません。

関根正雄先生の偉業などの記事に敬服し深く感謝しております。（東京都 黒部愛子）
 そうですね。年齢を感じさせない先生のお力にスタッフ一同驚いております。

年一回ではなく毎月発行してもらいたい。（横浜市 山下和雄）
 ありがとうございます。編集長も泣いて喜んでおります。

読者のひろば

敬称略

マザーテレサの「そこにイエスがいるから」の言葉に向かって奉仕しておられる方の生きざまに教えられました。（一関市 鈴木三次）
 私たちも教えられます。

今号の特集「聖書に生きる—もう一つの人生」（外村民彦記）を読んで、松崎豊さんなど四人の方々の真摯なボランティア活動にそれぞれ深い感銘を受けた。尚また、末尾で紹介されたオーストラリアの銀行の東京支店長の行為は外村民もいたく感心されていたが、大方の日本人からみると、実に目をみはるばかりの善行であり、感動を禁じ得なかった。
 ありがとうございます。皆様の生活に夢と希望を与え続けてゆくのがソアの使命でございます。（新潟市 樋浦久江）

毎号、違った方面からのお話を読むことができ、これだけ聖書に関連しているいろいろなことが生まれ、なされることを感動を持って知ることができています。（つくば市 原沢あゆみ）
 これからもどんどん皆さんを感動させてまいります。

ご案内

読者のひろばは、読者の皆様からの聖書に関する（内容など）ご質問にお答えします。またお便りもお寄せください（200～400字程度）。FAX（03-3567-4436）でも受け付けます。ご掲載分には記念品をお送りします。

本誌No.4に掲載された「聖書に生きる—もう一つの人生」（外村民彦記）を読んで、松崎豊さんなど四人の方々の真摯なボランティア活動にそれぞれ深い感銘を受けた。尚また、末尾で紹介されたオーストラリアの銀行の東京支店長の行為は外村民もいたく感心されていたが、大方の日本人からみると、実に目をみはるばかりの善行であり、感動を禁じ得なかった。

私自身、これまで七十数年の人生を顧みてボランティア活動に多少でも似た行為をしたことが唯の一度でもあったらどうかと自問していても、ほとんど皆無であったとしか答えざるを得ない。

もっとも、若い頃は戦前、戦後の厳しい社会状況の中で、がむしゃらに働くのみで、余分のことなどは一切考える余裕もなかったという

前号の
“特集”を読んで

山本一芳

その後年月を経て仕事からも解放されてみると、改めて自分の過ごしてきた人生は一体何だったのであろう。過去に従事してきた職業の数々が、どれほど世のため、人のために貢献できたかどうか、反省することしきりである。

もし、体力的に元気であったら、越前桃子さんが取り組んでおられる「拡大写本」のような奉仕など、努力次第では自分にも出来るかもしれないと考えたりもしたが、残念ながら時既に遅く、現在闘病中の身で、逆に今にもボランティアの世話を受ける側になる可能性をもった病人であることをとんと失念していた。

ともあれ、今後も号を重ねる毎に、いよいよ素敵な記事で悦ばせて下さることを希んで止みません。（日本福音自由武蔵之荘教会出席）

●お願い
 次号（第6号）では「戦後五十年」を特集します。「戦争と聖書」「戦争と信仰」というテーマでエッセーをお寄せください。（六〇〇字以内）
 締切は二月二十日。ご掲載分には記念品をお送りました。

Q 出エジプト記20章5節「わたしは熱情の神……」と訳されている箇所は質問があります。口語訳では「妬心神」と訳されていたと思うのですが、「熱情」と「妬心」では意味の上で大きく異なると思います。どうか貴協会のご回答をお願いいたします。（豊島区 山村権吉）

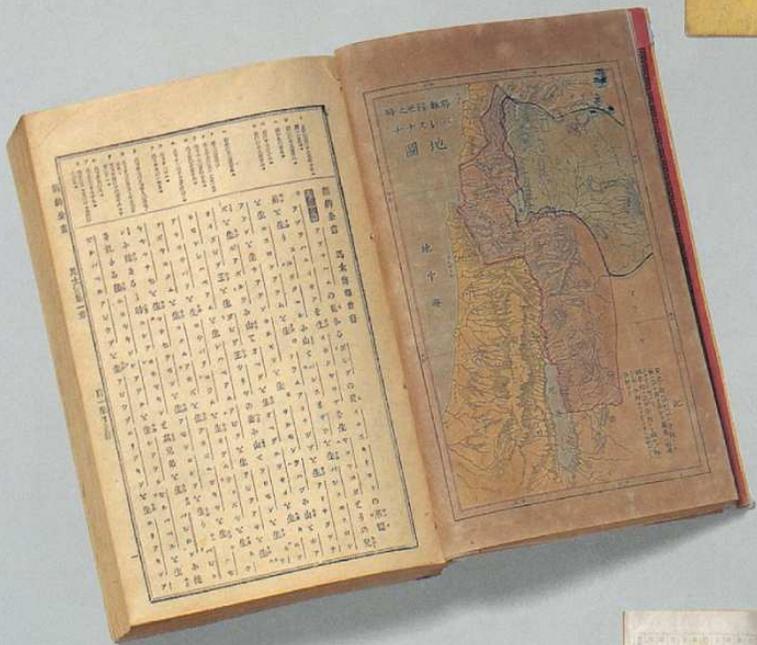
A お答えいたします。「熱情」とは「妬み」と日本語に訳さ

れているヘブライ語の単語は全て「カンナー」です。この「カンナー」という形容詞の語根は元来、激しい感情によって体が赤くなることを意味しており、英語では、jealousともzalousとも訳せる言葉です。夫が妻に対する場合は「嫉妬」と訳すことが適切ですが（民5・15以下）人間が神に対する場合は熱情とも情熱とも訳しうるでしょう（民25・10以下、王上19・10、14）。神が人間に対する場合には、その根本に人間に対する熱愛があるわけで、日本語の妬むという言葉では、嫉妬という否定的な面のみが一方的に強調されてしまいます。熱情と訳すことによって、神の激しい愛は否定の働きも、肯定する働きもともに持っていると思われま

●お分りいただけただけでしょうか。皆様からの質問を大募集いたします。どうぞお送り下さい。

聖書図書館蔵書シリーズ—④ 翻訳委員社中訳 引照新約全書

横浜 1880年刊
2冊 縦：22.2cm 横：16cm



1872年9月、最初の在日プロテスタント宣教師会議が横浜のヘボン宅で開催され、新約聖書の翻訳を共同で行うことが決議された。各教派から選出された7名の委員で「翻訳委員社中」が組織され、ヘボン、S. R. ブラウン、グリーンを中心に、日本人の補佐として奥野昌綱、松山高吉、高橋五郎が協力した。翻訳はギリシア語原典から訳され、漢訳聖書や英語の欽定訳を参考にしたという。日本人補佐の優れた協力によって、格調高い文体となった。翻訳は1874年から開始され、訳了した書から分冊で刊行、1880年に新約聖書として出版された。

歴史接写

仲井一雄——コルポーター(聖書普及員)

日本聖書協会元職員



自転車で家々を訪ねて聖書を頒布するコルポーター。1951(昭和26)年頃。

コルポーター(聖書売捌人または聖書普及員)を最初に採用したのは一八八四年アイルランドの福音協会で、その後欧米各国で採用されたと言われている。日本ではコルポーターと言うと聖書普及員を指して言うのが通例になっている。日本の聖書普及員の歴史は古く、海外の聖書協会が明治の初め日本で事業を開始した頃、少数の者がぞうり履きで宣教師と共に頒布していたという。明治後期から昭和の初期にかけて英国、米両国聖書協会(支社)にはそれぞれ十名ほどの普及員

がいて、活動をしていた。日本聖書協会にも普及員の働きは続けられていて、日中戦争の始まる頃には、スパイと間違われ特高につけられたり、時には、国賊とのしられ塩をまかれたこともあったという。そして太平洋戦争で、一時中断。再開されたのは、戦争終結後海外聖書協会の援助を受けてからで、始めは各地の教会の先生方に普及員を委嘱し、教会を通しての頒布に努めた。一九五二年頃から専任の普及員三十数名を採用し何組かのチームを作って計画的に各地に派遣した。この働きを知った『アサヒグラフ』の記者が「人さまさまの欄に、こんな記事を載せてくれた。『地の果てまでも福音を伝えよう』と山から谷へ、村から町へ、一軒一軒訪問して聖書(部五円)を売り歩いている人たちがいる。コルポーターと呼ばれる日本聖書協会の聖書普及員だ。この人たちは、普通四、五名が一組になって指示された地方に二、三か月滞在、手分けして伝道をする。また、山間僻地を自転車で飛び回るので、その肉体的疲労も並大抵ではない」と。私も一九四九年聖書普及員に採用され、この働きに加えていただいた。一九五三年度から始まったチームによる頒布は十二年たった一九六五年度には全国の頒布を終了していた。しかし、この頃の普及部は曲がり角にあった。物価の高騰で経費がかかり過ぎ、賄えなくなっていた。いろいろ手段を尽くしたが一九六六年度で普及員制度を解消せざるをえなかった。日本の普及員の使命も終わったのかもしれない。

JBS History / Colporteur / Nakai Kazuo

編集後記

通勤の電車や新宿などの繁華街で多くのアジア系の外国人を見かけるのは、最近ではごく普通のことになりました。彼らの多くはこの繁華日本に職を求めて来た人々です。しかし彼らは労働力として日本社会で必要とされるだけではなく、彼らの生活がどうなっているのか、あまり考えられていないのが実情のようです。今回の「特集」はこのような社会の中で、在日外国人の信仰生活を支える、外国語による礼拝を行っている幾つかの教会を取り上げました。

外国人のいる社会を認識したことの無い日本人はとまどいことも多いのですが、新しい時代の隣人として、共に生きる」ことが私たちに求められているのです。アムステイのイエナス・ハンソンさんや、釜ヶ崎で労働者生活を共にされている本田神父を通して聞かせてきたのは、社会のあり方が生み出した苦しむ人々の叫びでした。私たちが必要なのはこれらの人々との「連帯」ですと言われる神父の声が耳に響き回っています。(一)

特集 戦後五十年

次号予告

●
ソア 第5号 NOVEMBER 1994
発行 財団法人 日本聖書協会
104 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3567-1980
FAX 03-3567-4406
郵 03-3567-1840
表紙イラストレーション 本田 一
デザイン株式会社 サインコンパニイ
写植 阪下 株式会社 サイネット
印刷 文通堂印刷株式会社